

## 呼びかけ語としての *hombre, mujer* について\*

### —文末における用法を中心に—

野村明衣

[抄録]

スペイン語の *hombre* には、話し手の感情表出である間投詞としての用法と、聞き手に向けられる呼びかけ語としての用法があるとされている (Fuentes 1990a, Portolés 1999他)。本稿では、呼びかけ語としての *hombre* の文末における用法を扱う。*hombre* は、聞き手の性別にかかわらず使用される無標の呼びかけであるというが (Beinhauer 1929; 1963, Fuentes y Alcaide Lara 1996)、呼びかけ語全体の中でどのように位置づけられるのだろうか。

また、呼びかけ語 *hombre* から派生したものに *mujer* がある (Fuentes y Alcaide Lara 1996, Portolés 1999)。呼びかけ語としての使用は、聞き手が女性である場合に限定されるが (Moliner 1998; 2007)、聞き手が女性である場合に用いられる *mujer* と *hombre* には何らかの差があるのだろうか。

キーワード：呼びかけ語、間投詞、hombre、mujer  
vocativo, interjección, hombre, mujer

## 0. はじめに

滝浦 (2008: 16) によると、聞き手の名前を呼ぶという行為は、「誰もが自分自身だと認識するものである個人名を呼ぶことで、話し手は聞き手の領域に声で触れる」ことを意味する。つまり、個人のアイデンティティを代表する名前を呼ぶことにより、話し手が聞き手の領域に近づくことができるような親密な関係にあることを表明するのである。スペイン語において、呼びかけ語は聞き手に積極的に働きかける話し手の態度を表すものである。聞き手への積極的な働きかけには、話し手が聞き手と親しくなろうという意図を持つものと、聞き手との間に距離を置こうとする意図を持つものの2種に分けられる。聞き手との間に距離を置く場合、そうすることによって聞き手への敬意を示したり、親しい相手に対する冷たい態度を表すことになる。そのような聞き手への働きかけの意図がなければ、発話内容をどのような態度で伝達するのかには無関心であり、知的意味の伝達のみで十分なので呼びかけ語は用いられない (野村 2015: 45)。

また、呼びかけ語は文の中で現れる位置によって異なる機能を果たす (野村 2014: 92)。文頭の位置では、(1) のように話し手の方を見ていない聞き手の注意を喚起する。

(1) [Raimunda está tratando de cubrir el cuerpo del cadáver con la manta.]

Paula: Mamá, la tía Sole.

(Volver: 57)

この機能を持つ文頭の呼びかけ語を対話中に用いると、話題転換を表明や後続発話への引き込みといった副次的な機能を果たす (野村 2014: 78-80)。

一方、(2) のような文末の位置でも呼びかけ語は積極的に使用される。

(2) Agustina: Pregúntalo a tu madre.

[La perplejidad da paso a un asombro doloroso.]

Raimunda: ¿¡A mi madre!? Mi madre está muerta, Agustina.

(*Volver*: 123)

文末では、話し手が先行発話をどのように伝達しようとしているかを表す(野村 2014: 86)。固有名詞の場合には、話し手が聞き手の名前を呼ぶことができる関係であること、あるいは聞き手に心理的に接近して発話を伝達しようとしていることを示して、発話を強めたり和らげたりする。呼びかけ語は、他にも文中や文間<sup>9)</sup>の位置でも使用されるが、これらはそれぞれ後続発話の文頭、先行発話の文末と見ることができ、呼びかけ語の中心的機能は、文頭における注意喚起と文末の話し手の発話態度の表明であると言える(野村 2014: 91)。

また、文末の位置に限って見ると、命令に文末の呼びかけ語を伴う場合、呼びかけ語の有無、また語彙によって次のような差が現れる。

(3) a. Ven.

b. Ven, María.

c. Ven, cariño.

(3)a は、何の呼びかけ語も付加されない、いわば裸の命令であり、話し手は聞き手に対して命題内容を伝達するのみである。これには聞き手に対する発話を調整しようという意図がないので、ぶっきらぼうな発話となる。これに(3)b や(3)c のように呼びかけ語を付加することによって、命令を強めたり和らげて伝達することができる。(3)b のような個人名の場合、発話状況やイントネーションによって発話内容をどのように調整しようとしているかが判断される。さらに、(3)c のように名詞や形容詞を用いると、その意味内容に従って話し手が聞き手のある立場に立たせ、同時に話し手自身が聞き手をそのように扱う位置にいることを表明することになり、先行発話に対する話し手の態度を効果的に伝達することができる。(3)c の場合、cariño は聞き手への愛情を表すのでその語彙の意味から命令の和らげとなる。このように、文末の呼びかけ語は、それが固有名詞であるか、または話し手と聞き手の関係性を表す名詞や形容詞であるかによって、異なるプロセスで話し手の発話態度を付加するのである。

さて、頻繁に使用される名詞の呼びかけ語に hombre、その女性形と思われ

る *mujer* がある。*hombre* については、間投詞としての用法も指摘されているが (Santos 2003: 410, RAE 2009: 2482)、本稿では、話し手の伝達態度が現れる文末における *hombre* の用法を中心にその機能を考察し、*mujer* とも比較してみたい。また、野村 (2015) で論じた *hijo/a*, *chico/a* とも比較し、呼びかけ語全体の中で *hombre* や *mujer* がどのような特徴を持つのかについて考察する。

まず、先行研究をもとに間投詞と呼びかけ語がどのように異なるのかを確認する。そして、*hombre* や *mujer* を伴う文の種類を調査し、それらが話し手と聞き手の年齢や性別による差があるのか、またどのような文脈で使用されるのかを、スペイン語母語話者を対象に実施したアンケートの結果を通して考察する。その結果から *hombre* と *mujer* の機能を仮説立て、スペイン映画のシナリオから収集した実例を用いて検証する。

## 1. 先行研究

### 1.1. 間投詞と呼びかけ語

*hombre* の機能を明らかにするにあたって、まずは間投詞と呼びかけ語が先行研究においてどのように位置づけられているのかを確認していこう。Alonso Cortés (1999: 4024) は、間投詞 (*interjección*) を話し手の特別な心の状態 (*un estado mental particular*) を表明するものと説明し、*ah* や *ay* などの話し手の感情を表すものを例として挙げている。一方、呼びかけ語 (*vocativo*) については、名詞などで聞き手の注意を喚起するもの (*apelar o llamar la atención del oyente*) とし、*señor* や *niño* などの例を挙げている (Alonso Cortés 1999: 4037)。また、RAE (2009: 2481) は間投詞を意味的に感情表出的間投詞 (*interjección expresiva*) と注意喚起的間投詞 (*interjección apelativa*) の2種に分類している。感情表出的間投詞とは、話し手の様々な反応や心の変化を表明するものであり、これは Alonso Cortés (1999) の間投詞の記述と一致する。注意喚起的間投詞については、聞き手に向けられ、何らかの行為を促したり、感情や様々な態度を呼び起こすものと説明している。

ここで、呼びかけ表現<sup>2)</sup> (*apelativo*) と呼ばれる形式について確認しておく。呼びかけ表現とは、聞き手に向けられ、聞き手とのつながりや会話を維持する意図を表明するものである (Fuentes y Alcaide 1996: 198, Pons 1998a: 214)。Fuentes (1990b: 172) は *fíjate*, *imagínate*, *oye*, *mira*, *¿verdad?*, *¿no?*, *¿sabes?*, *¿entiendes?*, *¿comprendes?*, *¿ves?* を、また Pons (1998b: 31) は、スペイン語に関しては *escucha*, *mira*, *oye*, *vamos*, *¿comprendes?*, *¿entiendes?* を呼びかけ表現と

して扱っている<sup>3)</sup>。また、Portolés (1998: 72) は間投詞としての *hombre* は異形態をもたず、*mujer* のような異形態が認められる場合には呼びかけ表現であると述べている。つまり、これらは広い意味で注意喚起の機能を持つものであり、その下位分類として聞き手の名前を呼ぶ呼びかけ語があるのだと考えられる。

これらの記述から、間投詞とは話し手の感情を言語的に表出するものであり、呼びかけ語とは聞き手の個人名や性質、あるいは話し手と聞き手の社会的関係を表す名詞や形容詞を呼ぶことによって、聞き手に何らかの働きかけをするものであることがわかる。その働きかけが結果的に聞き手の反応を窺うことになるので、先行研究で述べられているように、聞き手とのつながりや会話を維持する意図を表明するものとして解釈されるのだろう。また、次節で見る *hombre*, *mujer* の機能について扱っている先行研究には、*hombre* を呼びかけ表現としているものと呼びかけ語とするものがあるが、先述の通り呼びかけ語は呼びかけ表現の下位分類であると考えられるので、本稿の *hombre* に関してはこれらは同一のものを指しているとみなす。

## 1.2. *hombre*

先に述べたように、*hombre* は間投詞としての用法を持つが、呼びかけ語全体を体系づける上で *hombre* が呼びかけ語なのか、あるいは間投詞として扱うべきなのかを明らかにしておく必要があると思われる。野村 (2014) では、固有名詞だけでなく、*niño/a*, *hijo/a*, *señor* などの語彙を含めて調査した結果、呼びかけ語は、文頭では聞き手の注意喚起、文末では話し手の発話態度の表明としての機能を果たすが、*hombre* はこれと一致するのだろうか。

先行研究において *hombre* の間投詞としての用法に挙げられているのは、その多くが文頭の例である。例えば、Gutiérrez Cuadrado (1996: 823) や Moliner (1998; 2007: 1566)、Maldonado González (1997; 2003: 1045) などの辞書では、(4) のような驚き、(5) のような疑いといった話し手の感情表出である間投詞としての用法を挙げている。

(4) ¡Hombre!, no sabía que estaba aquí tu hermana. (下線部筆者)

(Gutiérrez Cuadrado 1996: 823)

(5) ¡Hombre, si te me lo aseguras...! (下線部筆者)

(Moliner 2007: 1566)

一方、*hombre* は間投詞だけでなく呼びかけ語の用法も持つと説明している  
先行研究も見られる (RAE 2009: 2482、Santos 2003: 410)。Santos (2003: 410)  
は呼びかけ語としての用法に次の例を挙げている。

(6) Hombre, no seas así. (下線部筆者)

(Santos 2003: 410)

さらに、*hombre* は基本的には呼びかけ語であるとする先行研究も見られる。  
Beinhauer (1929; 1963: 30) は *hombre* は呼びかけ語であり、それが話し手自身  
に向けられた場合に間投詞に相当すると述べている。他にも、Fuentes y Alcaide  
(1996: 198) や Gaviño Rodríguez (2011: 9) がこの立場であり、次のような例  
を挙げている。

(7) No me hables del trabajo, hombre. (下線部筆者)

(Fuentes y Alcaide 1996: 198)

(8) Venga, hombre, no te enfades. (下線部筆者)

(Gaviño Rodríguez 2011: 9)

また、*hombre* が使用される位置によって異なる機能を果たすという記述も  
ある。Martín Zorraquino y Portolés (1999: 4174- 4176) や Cuenca y Torres (2008:  
255) によると、文頭では驚き、不同意、怒り、言いかえ等を、文末では和ら  
げや強調として機能するという。

(9) AMBROSIO: [...] Don Julio, ¿cómo esté por aquí?

JULIO: *Hombre*, no es tan raro, verme por aquí.

(Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4174)

(10) MENÉNDEZ: ¿Pero usted la ha ofendido?

NUMERIANO: ¡Yo qué la voy a ofender, *hombre*!

(Martín Zorraquino y Portolés 1999: 4176)

これらの記述に従うと、話し手の感情表出は、前節で述べたように間投詞が  
担うものなので、*hombre* は文頭では間投詞として機能することになる。しかし、  
(6) の呼びかけ語の例は文頭に置かれており、この位置では両方の機能を果た

す可能性があるだろう。一方、Cuenca y Torres (2008: 255) は文末の *hombre* については呼びかけ語とみなしている。実際に、先ほどの *hombre* を本来呼びかけ語としている (7) や (8) の例は、どちらも文頭以外の位置に置かれている。また、文末の *hombre* を和らげや強調とする記述は、野村 (2014) で論じた文末の他の呼びかけ語の機能と一致している。しかし、*hombre* が間投詞か呼びかけ語かを、位置による差と明言している先行研究は見当たらない。したがって、*hombre* の機能全体を解明するにあたって、まず本稿では文末の位置の用法について考察し、文末では *hombre* が本当に呼びかけ語としての性質を持つのか、またその機能が他の呼びかけ語と同様に先行発話に対する話し手の発話態度の表明なのかを検証したい。

次に、*hombre* の具体的な用法に関する先行研究を見ていく。Beinhauer (1963: 29) は、*hombre* を使用できる対象について、次のように述べている。

El vocativo *hombre* tiene la particularidad de aplicarse en tono familiar incluso a sujetos femeninos de cualquier edad, y su significado se ha desvanecido de tal forma, que no sólo se usa para seres humanos, sino en general para toda especie de seres vivos, por tanto para animales.

(Beinhauer 1963: 29)

*hombre* は親しみをこめて話す場合に、男性だけでなくどんな年齢の女性にも、さらに生物なら何にでも使用できるという。この他にも女性の聞き手にも使えるという記述は複数の先行研究で見られた (Fuentes 1990a: 166, Seco et al. 1999; 2011: 2479, Cuenca y Torres 2008: 236)。

また、Fuentes y Alcaide (1996: 203) には、次のような説明が見られた。

Hombre es el apelativo no marcado, que se ha gramaticalizado y amplía su campo funcional. Es elemento modal, reafirmativo, apelativo y fático.

(Fuentes y Alcaide 1996: 203)

*hombre* は無標の表現で文法化しており、感情表出的で、確認、呼びかけ表現として、また交感的にも使用されると説明している。しかし、ここでの無標の呼びかけ語とは、具体的にどのようなものなのかについては言及されていない。

### 1.3. mujer

一方、*mujer* に関する先行研究は、*hombre* と比べると非常に少ない。Moliner (2007: 2013) は *mujer* について、くだけた発話場面で、特別な敬意を必要としない女性に対する感嘆文で使われる呼びかけ語であると説明し、次のような例を挙げている。

(11) ¡Mujer... qué cosas dices! (下線部筆者)

(Moliner 2007: 2013)

また、Portolés (1998: 73) も、*mujer* を呼びかけ語 *hombre* の異形態とし、聞き手が女性の場合に用いられると述べている。

(12) a) Calla, *hombre*, si no es más que un momento.

b) Calla, *mujer*, si no es más que un momento.

(Portolés 1998: 73)

Fuentes y Alcaide (1996: 203) は *hombre* を無標としていたが、*mujer* については次のように述べている。

*Mujer* es una variante condicionada por la realidad: intercambio entre dos seres femeninos, pero sólo en caso marcado, en que el hablante se percata y mantiene, pues el contenido semántico originario, no lo ve como una unidad gramaticalizada. Aparece, pues sólo como apelativo, (...).

(Fuentes y Alcaide 1996: 203)

*mujer* は女性間で、有標の場合に用いられ、文法化した形式とはみなされず、呼びかけ表現としてのみ現れるという。ここでは *mujer* を有標としているが、その有標性に関する詳しい記述はなく、無標とする *hombre* が女性に使われた場合との差についても説明していない。

これらの先行研究から、本稿では次のような問題点を明らかにしたい。まず第一に、*hombre* は間投詞としての用法が多く見られるが、それが文末に置かれると呼びかけ語として機能するのかということ、第二に、*hombre* の無標性とは、具体的にどのようなものなのかということ、そして第三に、*hombre* が



女性に対しても使用できるのであれば、女性に対する hombre と mujer には何らかの差があるのか、という 3 点である。

## 2. 考察

### 2.1. hombre, mujer が現れる文の種類

では、具体的に用例を考察していこう。まず、スペイン映画20作品のシナリオから収集したデータの中で、hombre と mujer がどのような種類の文と現れるのかを調べた。文の種類は、Searle (1969, 1979) が規定した言明 (assertive)、行為指示 (directive)、行為拘束 (commissive)、宣言 (performative)、感情表現 (expressive) の 5 つの言語行為をもとに分類した<sup>4)</sup>。hombre を伴う例は全部で 63 例得られ、そのうち文末に現れるのは 38 例であった<sup>5)</sup>。以下の表 1 に文末の hombre を伴う文の種類をまとめる。

表 1 hombre を伴う文の種類

言明	18
行為指示	16
感情表現 <sup>6)</sup>	4

言明は主張や説明、行為指示は命令、勧誘や質問、感情表現は感謝、謝罪、挨拶、感嘆といった行為を含む。hombre は言明を表す文に多く現れており、次に行為指示を表す文が続く結果となった。この結果を、表 2 に示した文末における mujer (26 例) を伴う文の種類の場合と比べてみよう。

表 2 mujer を伴う文の種類

行為指示	13
言明	10
感情表現	3

mujer は先の hombre とは異なって、行為指示を表す文に最も多く現れ、次に言明を表す文という結果であった。このことが、Fuentes y Alcaide (1996) のいう hombre の無標性、また mujer の有標性と関係するのだろうか。次節では、この結果をもとにいくつかの文脈を作成し、話し手と聞き手の性差や年齢差を考慮して実施したアンケートを分析する。

## 2.2. アンケート調査

### 2.2.1. 作例による分析

次に、スペイン語母語話者 6 名（スペイン出身の30代男性 4 名、20代女性 2 名）に対して、表 1 と表 2 の結果をもとに作成したいくつかの文脈を提示し、hombre と mujer がどのような文脈で使われやすいかを調査した。hijo/a, chico/a について考察した野村（2015）の結果と比較できるように、話し手と聞き手の性別や年齢差は同じ設定にし、いくつかの文脈は同じものを使用した。年齢は、60才と30才とし、年上の話し手（60才）から年下の聞き手（30才）、年下の話し手（30才）から年上の聞き手（60才）、話し手と聞き手どちらも同年齢（30才）という 3 つのパターンを用意した。

文脈の一つ目は次の (13) に示すように、聞き手をなだめる意味を持つ命令の例である。話し手と聞き手は会社の同僚で、打ち合わせに遅刻しそうだ慌てる聞き手を、話し手は「落ち着いて、心配するな」となだめる。その発話に現れる呼びかけ語を空欄にして、母語話者には話し手と聞き手の年齢差と性差を示した解答欄に記入してもらった。

(13) [A y B son compañeros/as de la oficina y están comiendo juntos/as.

A mira el reloj y piensa que va a llegar tarde a la reunión preliminar con un cliente. Le entran los nervios y se pone a recoger la mesa.]

A: ¡Que voy a llegar tarde!

B: Tranquilo/a, no te preocupes, ( ).

A: Gracias.

これを母語話者に提示し、各関係で hombre または mujer と呼びかけると自然かどうかを、natural, menos natural, no es natural の 3 つの選択肢で回答してもらった。その結果は表 3 の通りである。性別は話し手と聞き手のそれぞれの性別、年齢差は話し手と聞き手の年齢の上下を表す。A ～ F は回答者、○は natural、△は menos natural、×は no es natural を指す。

表3 なだめる場面における hombre, mujer のアンケート結果

性別	年齢差	hombre						mujer					
		A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F
男→男	上→下	○	○	○	○	○	○						
	下→上	△	○	×	○	○	○						
	同	○	○	○	○	○	○						
男→女	上→下	△	△	○	△	×	×	○	○	○	○	○	○
	下→上	×	×	×	△	×	×	△	○	△	○	○	○
	同	○	×	○	△	×	×	○	○	○	○	○	○
女→女	上→下	×	△	○	△	×	×	○	○	○	○	○	○
	下→上	×	×	×	△	×	×	△	○	△	○	○	○
	同	×	×	○	△	×	×	○	○	○	○	○	○
女→男	上→下	○	○	○	○	○	○						
	下→上	×	○	×	○	○	○						
	同	○	○	○	○	○	○						

この結果を、○を3点、△を1点、×を0点として点数化したものが表4である。

表4 なだめる場面における hombre, mujer の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hombre	18	13	18
	mujer			
男→女	hombre	6	1	7
	mujer	18	14	18
女→女	hombre	5	1	4
	mujer	18	14	18
女→男	hombre	18	12	18
	mujer			

まずは、性別の列の1、4段目の男性の聞き手に対する hombre の結果を見てみよう。1段目の結果は、左から順に18、13、18であり、4段目の結果は18、12、18と、どちらも年上の聞き手に対しては13（1段目）、12（4段目）と若干低くなっているが、話し手と聞き手の年齢差にかかわらず使用可能であることがわかる。また、聞き手が女性である2、3段目の hombre の点数を見ると、2段目は6、1、7で、3段目は5、1、4と点数は低い、女性に対して hombre を使用できないわけではないようである。ただ、年上の女性に対する場合の点数1点は、他の年齢差よりも低く、hombre を使用しにくいことが

わかる。

では、この *hombre* の結果を、男性の聞き手に使用される *hijo*, *chico* と比べてみよう。次の表5は、野村（2015）において同じ文脈と条件で *hijo/a*, *chico/a* について行ったアンケートの結果である。

表5 なだめる場面における *hijo/a*, *chico/a* の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	<i>hijo</i>	18	1	5
	<i>chico</i>	16	1	13
男→女	<i>hija</i>	18	2	7
	<i>chica</i>	13	2	15
女→女	<i>hija</i>	18	2	11
	<i>chica</i>	16	3	18
女→男	<i>hijo</i>	18	0	7
	<i>chico</i>	14	2	15

（野村 2015: 47）

この表の *hijo* の結果を見ると、1 段目が18、1、5で、4 段目は18、0、7である。*hijo* は年下の聞き手には使用できるが、年上には使用しにくく、同年齢でも低い点数となっている。また、*chico* の結果は、1 段目が16、1、13で、4 段目が14、2、15となっており、年下と同年齢には使用できるが、年上には使いにくいことがわかる。これは、*hijo/a* が聞き手を子ども扱いする、また *chico/a* が聞き手を自分より年下か同等に扱うものであることによる（野村 2015: 53）。この結果と比べると、表4の *hombre* は全体的に高い点数であり、*hombre* が *hijo*, *chico* と比べてどの年齢差にも使えることが確認できる。このことから、*hombre* の無標性とは性差、年齢差に関係なく使用可能というものだと言えるだろう。

次に、表4の2、3 段目の女性に対する *hombre* と *mujer* の点数を比べてみよう。2 段目の *hombre* は、左から順に6、1、7で、*mujer* は18、14、18である。また、3 段目の *hombre* は、5、1、4で、*mujer* は18、14、18であり、(13)のように、命令であっても聞き手をなだめようとする場合には *hombre* よりも *mujer* が優勢となっていることがわかる。

では、次に(13)よりも厳しい内容の命令の例について見てみよう。A と B は会社の同僚で、電話をしている話し手 A は隣で大声で話す聞き手 B に注意をする。それでも大声で話し続ける B に腹を立てた A が、もう一度小さい声

で話そう厳しく迫る場面である。その結果を表6に示す。

- (14) [A y B son compañeros/as de la oficina y tienen mucha confianza. B está hablando con su cliente por teléfono y al lado está A charlando con una compañera. ]

B: Oye, habla un poco más bajo, que estoy hablando con mi cliente.

(A no le hace ni caso y sigue hablando alto.)

B: ¿No me has oído? ¡Habla más bajo, ( )!

A: Ah, lo siento.

表6 非難の場面における hombre, mujerの使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hombre	18	11	18
	mujer			
男→女	hombre	12	7	14
	mujer	12	7	12
女→女	hombre	11	7	11
	mujer	12	7	12
女→男	hombre	18	10	18
	mujer			

この例では、聞き手が女性である2、3段目に先ほどの(13)の例における表4の結果との差が見られる。(13)では、hombreよりもmujerの方が優勢であったが、(14)では2段目のhombreの点数が12、7、14と上がり、mujerの12、7、12という点数とほぼ同じになっている。また、3段目でも同様の結果であった。(13)と(14)の違いは、話し手の聞き手に対する命令内容の厳しさである。同じ命令でも、聞き手をなだめる場面で高かったmujerの点数が、聞き手を非難し、命令内容の遂行を迫る場面では下がっていることから、mujerは和らげとして機能すると推測できる。逆に言えば、(14)は厳しい場面での発話なので、和らげを避けるためにhombreの点数が上がっているということになる。mujerが優しさの意味素性を付加するという点については、次節で検証したい。

また、表6では、年上の女性に対するhombreとmujerは同等の点数となっている。表4では年上の女性に対するhombreの点数が低くなっていたが、(14)のような厳しい場面ではあまり差がないことが確認できる。これに対して、表4のなだめる場面においては年上の女性に対するhombreが許容されにくい結

果となっている。母語話者に実施したアンケートでは、女性に対する *hombre* は *mujer* と比べた場合には怒っているような印象を受け、聞き手が年上の女性である場合には失礼な感じがする、というコメントが見られた。この場面では話し手は聞き手をなだめようという意図を持っているので、発話内容を優しく伝達するべきである。さらに目上の聞き手に対してはきつくなってしまうといけないので、必然的に *mujer* がふさわしいことになる。したがって、*hombre* を用いると怒っている、失礼だと感じるのは、なだめる場面で *mujer* を避けることに、話し手が優しく伝達する気がないという意図を含んでいると受け取られるためだと考えられる。

もう1例見てみよう。(15)は、従業員であるAの発話内容に社長であるBが驚く場面である。アンケートの結果は表7の通りである。

(15) [B, director/a general, habla con su empleado/a A. Tienen mucha confianza.

Comentan las noticias del día.]

A: Dicen que robó más de 100 millones de euros.

B: ¡Qué barbaridad, ( )!

表7 感嘆の場面における *hombre*, *mujer* の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	<i>hombre</i>	6	3	6
	<i>mujer</i>			
男→女	<i>hombre</i>	2	1	5
	<i>mujer</i>	6	4	6
女→女	<i>hombre</i>	2	1	1
	<i>mujer</i>	6	4	6
女→男	<i>hombre</i>	5	2	5
	<i>mujer</i>			

表7の結果を見ると、先の例(13)の表4、(14)の表6よりも *hombre*, *mujer* 共にかなり点数が低くなっている。母語話者に対するアンケートでは、それぞれの例で呼びかけ語を付加しない場合にどのように感じるかを、自然 (*bien*)、ぶっきらぼう (*seco*)、厳しい (*duro*) という3つの選択肢で質問しているが、この例では6名全員が呼びかけ語がない方が自然だと回答している。その理由として、この場面における感嘆文には聞き手への働きかけがないからだと考えられる。というのも、野村(2015: 45)で考察したように、呼びかけ語は主に

話し手と聞き手が親しい関係、あるいは働きかけようとする場面で使用されるものであり、働きかけの意図がなければそもそも付加されない。特にこの例は聞き手に直接関わらない内容への感嘆なので、聞き手に働きかける必要はなく、呼びかけ語が不要だと判断されたのだろう。呼びかけ語は、それ自身が聞き手に向かうものなので、明らかに聞き手に向けられる発話でないと、付加しにくいのである。

また、表7の結果から文末の *hombre* は、Cuenca y Torres (2008) が指摘するように呼びかけ語としての性質を持つことがわかる。というのも、この例における *hombre* が話し手の感情表出である間投詞だとすれば、同じように話し手の感情を表す感嘆文に伴うことができるはずだが、*hombre* の点数が低く、この場面では付加する必要がないと母語話者が回答しているということは、間投詞ではなく呼びかけ語だと判断できる。しかし、感嘆文の中にも聞き手に関わる内容に対する驚きを表すものもあるので、そのような場合の呼びかけ語の付加については今後の課題とする。

このほかにも、激励、質問、感謝といった文脈でアンケートを行ったが、*hombre* に関しては使用しにくい文脈はあまりないようである。つまり、*hombre* の無標性は、性差や年齢差にかかわらず使用できるというもののだけでなく、あらゆる文脈で使用可能であるという面も持つと言える。野村 (2015: 53) では、*hijo/a* と比べた場合の *chico/a* について、基本的に年下あるいは同年齢の聞き手に使用される無標の呼びかけ語であり、付加される文脈次第で厳しくも激励のようにも解釈される、と結論づけた。すなわち、年下や同年齢への呼びかけという場面において、*chico/a* は *hijo/a* と比べた場合には無標の位置にあり、その意味は厳しくも激励にも解釈される。ただ、もっと視点を上げて呼びかけ語を見ると、*hombre* はこの年齢制限さえもない無標性を持っていると言える。これに対して *mujer* は、年齢差には制限がないが、聞き手が女性に限られる。さらに、*hombre* と比べると和らげという意味素性を付加する有標の形式であり、表2で *mujer* が行為指示に最も多く伴っていたのは、その証左であると考えることができる。

### 2.2.2. 実例による分析

前節で考察した *hombre* と *mujer* の機能を検証するために、シナリオの例を用いてもう1つのアンケート調査を行った。実際には *mujer* が使用されている文脈において、呼びかけ語の部分为空欄にして、*hombre* や *mujer* のそれぞれ

を入れた時の印象を、hijo/a, chico/a で行った時の分析を参考にして次の選択肢から選んでもらった。和らげの意味として優しい (cariñoso)、励まし (estimulante) を、厳しい意味のものとして批判的 (crítico)、厳しい (duro)、失礼 (descortés) を、また自由回答 (otro) も用意した。

最初に示す例は、Raimunda の家に Agustina が来たシーンである。Raimunda は Agustina に不信感を抱いているので、冷たい態度で迎え入れ、座るよう促す発話である。先ほどの (14) のような命令内容の遂行を迫る厳しい命令の例では、聞き手が女性であっても hombre の点数が高くなったが、厳しい命令に mujer を伴うとどのような印象を受けるのだろうか。アンケートの結果を表 8 に示す。

(16) Raimunda: ¿Quién es?

Agustina: Soy la Agustina.

[Raimunda abre y la invita fríamente a entrar. (...) Agustina lo nota.

La acompaña humildemente hasta el salón comedor. ]

Raimunda: Siéntate, ( ).

Agustina: Vengo a pedirte perdón por lo del programa de televisión...

[Con un gesto, las dos hermanas le quitan importancia, pero se las ve dolidas.]

(Volver: 173)

表 8 厳しい命令の場面における hombre, mujer の印象

	A	B	C	D	E	F
hombre	descortés	duro	crítico	descortés	crítico	poco natural
mujer	cariñoso	crítico	cariñoso	cariñoso	cariñoso	duro

表 8 の結果を見ると、hombre に cariñoso を選択した母語話者はおらず、どれも厳しい意味のものが選択された。一方、mujer には crítico や duro もあるが、cariñoso が多く選択された。hombre の結果と比べて、mujer を用いると母語話者は明らかに発話の和らげとなると感じていることが確認できる。

また、次の例は同じ命令でも励ましを伴うものである。病気の手術を受けた Agustina に対して、Raimunda が希望を捨てないように励ますシーンである。アンケートの結果は表 9 の通りである。



(17) [Raimunda lleva un pequeño ramo de flores en la mano. Entra en la habitación de Agustina. Se saludan. Tranquila, a pesar del drama:]

Agustina: Me han abierto y me han vuelto a cerrar. Yo sabía que tenía algo malo...

Raimunda: ¡No pierdas la esperanza, ( )!

(Volver: 123)

表 9 励ましの場面における hombre, mujer の印象

	A	B	C	D	E	F
hombre	crítico	estimulante	duro	estimulante	crítico	crítico
mujer	cariñoso	cariñoso	cariñoso	cariñoso	cariñoso	cariñoso

この例では、mujer に全員が cariñoso と回答した。このことから、hombre, mujer のどちらを伴っても、それが付加された発話の命題内容や、命令の意図は変わらないが、どちらを選択するかによってその伝え方に差が生じることがわかる。和らげて伝えたいなら mujer を、またそのことから逆に厳しく伝えたいなら hombre を選択して発話に付加するのである。ただ、hombre に2名が estimulante と回答しているので、hombre は必ずしも冷たい厳しさを意味するものではないようである。文脈次第で、時に激励のように解釈されることもあるのだろう。

しかし、mujer も必ずしも cariñoso として機能するわけではないようである。次の例は、Emilio が所有する閉店したレストランを見に来た男性が怪しい、そこでドラッグを売ったりするのではないかと Raimunda が電話で報告するシーンである。怪しい男性に「レストランはあまり繁盛していなかった」と言ったら、男性が「その方がいい」と答えた、と言う Raimunda を Emilio が非難する。表10にアンケート結果を示す。

(18) Raimunda: ¿Emilio? Soy Raimunda.

Emilio: ¡Qué alegría oírte, Raimunda! ¿Ha ido un hombre a ver el restaurante?

Raimunda: Sí. Pero no me ha dado buena espina, yo creo que lo quiere como tapadera.

Emilio: Tapadera, ¿de qué?

Raimunda: De drogas, o para poner un puticlub, no sé, porque cuando le he comentado que el negocio no funcionaba, él me ha respondido

que mejor, o sea...

Emilio: (Contrariado). ¡Pero cómo se te ocurre decirle eso, ( )!  
(Volver: 116)

表10 非難の場面における hombre, mujer の印象

	A	B	C	D	E	F
hombre	crítico (+)	crítico	duro	crítico	crítico (+)	exasperado
mujer	crítico (-)	descortés	cariñoso	crítico	crítico (-)	crítico

この例では、mujer に1名が cariñoso を選択したが、crítico が多い結果となった。表8、9の母語話者の印象を見ると、hombre と mujer は、厳しさと優しさのような質の違うもののように見えるが、文脈によっては、mujer は程度の軽減となるようである。これは、回答者 A、E が hombre と mujer のどちらにも crítico を選択しているが、その程度は hombre が強く、mujer が弱いとしていることから明らかである。hombre と比較すると優しい印象にはなるが、mujer そのものがいつも優しさを表すものではなく、まさしく和らげとして機能すると言っていいだろう。

### 3. まとめ

本稿では、文末の hombre が呼びかけ語であるのか、またその機能について、そして mujer との差異について考察してきた。文末の hombre は、感嘆文のような聞き手への働きかけの意図がない発話には付加されず、話し手の伝え方に応じて mujer と言いかえ可能であることから、間投詞ではなく呼びかけ語であると言える。そして、他の呼びかけ語と同様にそれを付加することによって発話の伝え方を調整することができる。また、母語話者を対象に実施したアンケートの結果を通して、聞き手の年齢、性別にかかわらず、あらゆる文脈で使用できる無標の呼びかけ語であることが確認できた。これに対して mujer は、hombre と同様に年齢差があっても用いることができるが、それが持つ語彙的意味によって聞き手が女性である場合に限定される。全くの無標である hombre と比べると、聞き手を非難する場面よりもなだめる場面での容認度が高かった。このことから、mujer は聞き手への働きかけとしては、優しさや厳しさの程度の軽減といった意味素性を付加する有標の形式であることがわかる。

また、hombre, mujer を hijo/a, chico/a と関連づけると、hombre と mujer は年齢差にかかわらず使用されるのに対して、hijo/a, chico/a は基本的に年下、あ

るいは同年齢の聞き手に使用される。*hijo/a* はそれが持つ語彙的意味によって、聞き手を疑似的な親子関係に置くので、優しさの意味素性を持つ。*mujer* も *hijo/a* と類似した意味素性を持つが、聞き手は女性に限定される点において *hijo/a* とは異なる。また、*chico/a* は年下や同年齢の聞き手に使用される無標の呼びかけ語であり、文脈に応じて厳しさや激励の印象を与える。一方、*hombre* は話し手の年齢や性別に制限がなく、どんな文脈でも使用できるので、*chico/a* と比べてより広い意味での無標の呼びかけ語ということになる。*hijo/a* は年下の聞き手を慈しみ、*chico/a* は年下か同年齢の聞き手に働きかけ、また *mujer* は女性の聞き手に対する発話を和らげる。このことから、文末の呼びかけ語は、本来の語彙的意味を反映する傾向が見られると言えるだろう。

今後は、今回扱うことのできなかった文頭の用法を含めた *hombre* 全体の機能の解明を目指す。先行研究でも見られたように、*hombre* は間投詞として用いられるが、本稿の考察の結果、文末の *hombre* は呼びかけ語であり、間投詞としては機能しないことが明らかとなった。したがって、Martín Zorraquino y Portolés (1999) や Cuenca y Torres (2008) のいうように、文頭に置かれるか、あるいは文末に置かれるかによって異なる機能を果たすことが推測される。野村 (2014) では、文頭に現れる呼びかけ語について、聞き手の注意を喚起すると結論づけたが、*hombre* は Fuentes y Alcaide (1996) が指摘しているように文法化した表現なので、文頭に置かれても他の呼びかけ語とは異なって、呼びかけ語と間投詞のどちらの用法も持っているのではないかと考えられる。

また、Portolés (1998: 72) によると、*hombre* が間投詞として使用される場合、(19) のように *mujer* に言いかえることができないが、(12) のように呼びかけ表現としての *hombre* は *mujer* という異形態が認められると説明し、次のような例を挙げている。

(19) a) ¡*Hombre*, Carlos Prullàs, dichosos los ojos!

b) \*¡*Mujer*, María Prullàs, dichosos los ojos!

(Portolés 1998: 72)

(12) a) Calla, *hombre*, si no es más que un momento.<sup>7)</sup>

b) Calla, *mujer*, si no es más que un momento.

(Portolés 1998: 73)

文末の *hombre* の異形態が *mujer* であることを認めるこの記述は、文末の

hombre は呼びかけ語であり、話し手が聞き手に対して発話をどのように伝達したいかによって hombre, mujer のどちらかを選択する、という本稿の結論と一致する。これに対して、文頭の hombre は mujer に言い換えられないという説明は、文頭における hombre, mujer は異なる機能を果たす可能性があることを表している。

文頭の hombre だけでなく mujer の機能についても考察し、それを hombre と比較することによって、間投詞と呼びかけ語の両方の用法も持つと考えられる hombre の特徴を明らかにすることができるだろう。呼びかけ語として無標性が高い hombre について解明できれば、他の呼びかけ語との関連がより明確になり、呼びかけ語全体を体系づける足がかりになると考えている。

## 註

\*本稿は日本イスパニヤ学会第61回大会（2015年10月10日、神田外語大学）における口頭発表をもとに加筆修正したものです。当日貴重なご意見をくださった先生方に厚く御礼申し上げます。

- 1) 「文中」とは、Ramón: La persona que de verdad me ame, Rosa..., será precisamente la que me ayude a morir. (Mar adentro: 126)のように主節と従属節、あるいは条件節と帰結節の間の例、「文間」とは、Raimunda: No me ha olvidado, Emilio, pero desde que hablé contigo, mi vida ha sido como una película de Indiana Jones, ¡pero sin Harrison Ford! (Volver: 167)のように等位接続や並列的接続の間の例を指す。
- 2) 野村 (2014: 174)。
- 3) 野村 (2014) では、verdad、no、eh、呼びかけ語（聞き手の個人名や聞き手の属性を表す名詞や形容詞）、sabes、entiendes、ves、oye、mira、verás、fíjate、vamos について扱っている。
- 4) それぞれの行為を指す和訳は久保 (1997) による。
- 5) ¡Hombre!のように、単独での使用は、「単独」として分類している。
- 6) Searle (1969) は、挨拶を感情表現の行為に含めていないが、Haverkate (1993: 152) は挨拶も含まれると述べている。
- 7) この例は分類上は文間だが、この位置では文末の呼びかけ語と同様に、先行発話の強調や緩和といった機能を果たす (野村 2014: 91)。

## 参考文献

Alonso Cortés, Ángel (1999) “Las construcciones exclamativas. La interjección y las

- expresiones vocativas”, *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque et al. coords.) vol.3, Espasa Calpe, Madrid, pp.3993-4047.
- Beinhauer, Werner (1929; 1963) *El español coloquial*, Gredos, Madrid.
- Cuenca, María Josep y Marta Torres Vilatarsana (2008) “Usos de *hombre/home* y *mujer/dona* como marcadores del discurso en la conversación coloquial”, *Verba* 35, Universidad de Santiago de Compostela, Santiago de Compostela, pp.235-256.
- Fuentes Rodríguez, Catalina (1990a) “Algunos operadores de función fática”, *Sociolingüística Andaluza* 5. Secretariado de Publicaciones de la Universidad de Sevilla, Sevilla, pp.137-150.
- (1990b) “Apéndices con valor apelativo”, P. Carbonero y M. T. Paletm (eds.), *Sociolingüística andaluza* 5, Universidad de Sevilla, Sevilla, pp.171-196.
- y Esperanza R. Alcaide Lara (1996) *La expresión de la modalidad en el habla de Sevilla*, Servicio de Publicaciones del Ayuntamiento de Sevilla, Sevilla.
- Gaviño Rodríguez, Victoriano (2011) “Operaciones metalingüísticas del marcador de discursivo *hombre*”, *marcoELE* 12, Red de Revistas Científicas de América Latina y el Caribe, España y Portugal, RIBARROJA DEL TURIA, pp.1-11.
- Gutiérrez Cuadrado, Juan et al. (1996) *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Santillana – Universidad de Salamanca, Madrid.
- Haverkate, Henk (1993) “Acerca de los actos de habla expresivos y comisivos en español”, *Aproximaciones pragmalingüísticas al español. Diálogos Hispánicos* 12, Universiteit van Amsterdam, Amsterdam, pp.149-180.
- Maldonado González, Concepción (1997:2003) *Clave: Diccionario de uso del español actual*, Ediciones SM, Madrid.
- Martín Zorraquino, María Antonia y José Portolés Lázaro (1999) “Los marcadores del discurso”, *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque et al. coords.) vol.3, Espasa Calpe, Madrid, pp.4051-4213.
- Moliner, María (1998; 2007) *Diccionario de uso del español*, Gredos, Madrid.
- Pons Bordería, Salvador (1998a) “Oye y mira o los límites de la conexión”, *Los marcadores del discurso* (María Antonia, Martín Zorraquino et al. coords.), Arco Libros, Madrid, pp.213-228.
- (1998b) *Conexión y conectores. Estudios de su relación en el registro informal de la lengua*, Universitat de València, Valencia.
- Portolés, José (1998) *Marcadores del discurso*, Editorial Ariel, Barcelona.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009) “La interjección. Sus grupos sintácticos”, *Nueva gramática de la lengua española* vol.2, Espasa Libros, Madrid, pp.2479-2523.
- Santos Río, Luis (2003) *Diccionario de partículas*, Luso-Española de Ediciones, Salamanca.

- Searle, John R. (1969) *Speech Acts. An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- (1979) *Expression and Meaning : Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Seco, Manuel *et al.* (1999; 2011) *Diccionario del español actual*, Aguilar, Madrid.
- 久保進 他 (1997) 『意味と発話行為』, ひつじ書房, 東京.
- 野村明衣 (2014) 「スペイン語における情報伝達の方策 — スペイン語問投詞と日本語終助詞に関する対照分析 —」, 博士論文, 神戸市外国語大学, 神戸.
- (2015) 「スペイン語の呼びかけ語 *hijo/a*, *chico/a* について」, 『HISPÁNICA』 第59号, 日本イスパニヤ学会, 東京, pp.39- 59.
- 滝浦真人 (2008) 『ボライトネス入門』, 研究社, 東京.

## 資料

- Almodóvar, Pedro (2002) *Hable con ella*, Ocho y Medio, Madrid.
- (2006) *Volver*, Ocho y Medio, Madrid.
- Amenábar, Alejandro y Mateo Gil (2004) *Mar adentro*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael (1999) *La lengua de las mariposas*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael y José Luis Cuerda (2008) *Los girasoles ciegos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Balaguer, Javier y Alvaro García Mohedano (2001) *Solo Mía*, Ocho y Medio, Madrid.
- Berger, Pablo (2002) *Torremolinos 73*, Ocho y Medio, Madrid.
- Bollain, Iciar y Alicia Luna (2003) *Te doy mis ojos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Cavestany, Juan y Enrique López Lavigne (2004) *El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*, Ocho y Medio, Madrid.
- Chavarrias, Antonio (2007) *Las vidas de Celia*, Ocho y Medio.
- Gutiérrez, Chus y Juan Carlos Rubio (2005) *El Calentito*, Ocho y Medio, Madrid.
- Hidalgo, Manuel y Felipe Vega (2004) *Nubes de verano*, Ocho y Medio, Madrid.
- León de Aranoa, Fernando y Ignacio del Moral (2002) *Los lunes al sol*, Ocho y Medio, Madrid.
- Lindo, Elvira y Miguel Albaladejo (2003) *Manolito Gafotas*, Ocho y Medio, Madrid.
- Mañas, Achero (2003) *Noviembre*, Ocho y Medio, Madrid.
- Querejeta, Gracia y David Planell (2004) *Héctor*, Ocho y Medio, Madrid.
- Santiago, Roberto (2005) *El penalti más largo del mundo*, Ocho y Medio, Madrid.
- Soler, Antonio (2006) *El camino de los ingleses*, Ocho y Medio, Madrid.
- Toro, Guillermo del (2006) *El laberinto del fauno*, Ocho y Medio, Madrid.
- Urbizu, Enrique y Michel Gaztambide (2007) *La caja 507*, Ocho y Medio, Madrid.

## Uso de los vocativos *hombre* y *mujer* en posición final de oración

Mei Nomura

En español *hombre* tiene un uso interjetivo y otro vocativo: el primero expresa el sentimiento del hablante mientras que el segundo se dirige al oyente (Fuentes 1990a, Potolés 1999, *etc.*). En este artículo estudiaremos el uso vocativo de *hombre* en posición final de oración. Beinhauer (1929; 1963) y Fuentes y Alcaide Lara (1996) sugieren que *hombre* es un vocativo no marcado y se dirige tanto a *hombres* como a mujeres, pero desconocemos cómo se posicina respecto a otros vocativos.

También trataremos el vocativo *mujer* como derivación de *hombre* (Fuentes y Alcaide Lara 1996, Portolés 1999). Se usa como vocativo únicamente para dirigirse a mujeres (Moliner 1998; 2007), por lo que suponemos que en este caso debe existir alguna diferencia entre los vocativos *mujer* y *hombre*.